

井筒

世阿弥作

季	地	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
は	は	テ	キ		里	旅	
秋	大和	紀有常の娘	前に同じ		女	僧	

「是は諸国一見の僧にて候。我此程は南都七堂に参りて候。又是より初瀬に参らばやと存じ候。是なる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候。さては此在原寺は。いにしへ業平紀の有常の息女。夫婦住み給ひし石上なるべし。風ふけば沖つ白浪たつた山と詠じけんも。此所にての事なるべし。

歌
「昔がたりの跡とへば。其業平の友とせし。紀の有

常の常なき世。妹脊をかけて弔はん。く。

シテ次第

「暁ごとの闕伽の水。く。月も心や澄ますらん。

サシ

「さなきだに物の淋しき秋の夜の。人目まれなる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月もかたぶく軒端の草。わすれて過ぎし古へを。忍ぶ顔にていつまでか。待つ事なくてながらへん。げに何事も思ひ出の。人には残る世の中かな。

下歌

「唯いつとなく一筋に。頼む仮の御手の糸。道びき

給へ法の声。

上歌

「迷ひをも。照らさせ給ふ御誓ひ。く。げにもと
見えて有明の。ゆくへは西の山なれど。ながめは
四方の秋の空。松の声のみ聞ゆれども。嵐はいづ
くとも。定めなき世の夢心。何の音にか覺めてま
し。く。

ワキ詞

「我此寺にやすらひ心を澄ますをりふし。いとなま
めける女性。庭の板井を結び上げ花水とし。是な
る塚に回向の氣色見え給ふは。いかなる人にてま
しますぞ。

シテ詞

「是は此あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業
平は。世に名を留めし人なり。されば其跡のしる
しも是なる塚の陰やらん。妾も委しくは知らず候
へども。花水を手向け御跡を弔ひ参らせ候。

ワキ

「げにく業平の御事は。世に名を留めし人なりさ
りながら。今は遙に遠き世の。昔がたりの跡なる

を。しかも女性の御身として。かやうに弔ひ給ふ

事。其在原の業平に。いかさま故ある御身やらん。

シテ「故ある身かと問はせ給ふ。其業平は其時だにも。

昔男といはれし身の。ましてや今は遠き世に。故
もゆかりもあるべからず。

ワキ「もつとも仰せはさる事なれども。こゝは昔の旧跡
にて。

シテ「主こそ遠く業平の。

ワキ「あとは残りてさすがにいまだ。

シテ「聞えは朽ちぬ世語を。

ワキ「語れば今も。

シテ「昔男の。

地「名ばかりは。在原寺の跡旧りて。く。松も老い
たる塚の草。是こそ、れよ亡き跡の。一村ずゝき
の穂に出づるは。いつの名残なるらん。草茫茫々と
して。露深々と古塚の。まことなるかな古への。

跡なつかしきけしきかな。く。

ワキ詞
「猶々業平の御事くはしく御物語り候へ。

地クリ
「むかし在原の中将。年経てこゝに石の上。ふりに

し里も花の春。月の秋とて住み給ひしに。

シテサシ
「其頃は紀の有常が娘とちぎり。妹脊の心あさからざりしに。

地
「又河内の国高安の里に。知る人ありて二道に。忍びて通ひ給ひしに。

シテ
「風ふけば沖つ白波立田山。

地
「夜半にや君がひとり行くらんと。おぼつか波の夜の道。ゆくへを思ふ心遂げて。よその契りはかれぐなり。

シテ
「げに情知るうたかたの。

地
「あはれを述べしも理なり。

クセ
「むかし此国に。住む人の有りけるが。宿をならべて門の前。井筒によりてうなる子の。友達かたら

ひて。互に影を水鏡。面をならべ袖を懸け。心の水も底ひなく。うつる月日も重なりて。おとなしく恥ぢがはしく。たがひに今はなりにけり。其後彼まめ男。言葉の露の玉章の。心の花も色そひて。

シテ「筒井筒。井筒に懸けしまろが丈。

地「生ひにけらしな妹見ざる間にと。よみておくりける程に。其時女もくらべこし。振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。互によみし故なれ

や。筒井筒の女とも。聞えしは有常が。娘のふるき名なるべし。

ロング地

「げにや旧りにし物語。聞けば妙なる有様の。あやしや名のりおはしませ。

シテ「誠は我は恋衣。紀の有常が娘とも。いさ白波の立田山。夜半にまぎれて來りたり。

地「ふしぎやさては立田山。色にぞ出づるもみぢ葉の。

シテ「紀の有常が娘とも。

地 「又は井筒の女とも。

シテ 「はづかしながら我なりと。

地 「いふや注連縄の長き世を。 契りし年は筒井筒。 井筒の陰に隠れけり。 く。 (中入)

ワキ歌 「更けゆくや。 在原寺の夜の月。 く。 昔を返す衣

手に。 夢待ちそへて仮枕。 苔の筵に臥しにけり。

く。

後ジテ 「あだなりと名にこそ立てれ桜花。 年に稀なる人も

待ちけり。 かやうによみしも我なれば。 人待つ女ともいはれしなり。 我筒井筒の昔より。 真弓櫛弓年を経て。 今は亡き世に業平の。 形見の直衣身に触れて。 はづかしや昔男に移舞。

地 「雪をめぐらす花の袖。 (序の舞)

シテワカ 「こゝに来て。 昔ぞかへす在原の。

地 「寺井に澄める月ぞさやけき。 月ぞさやけき。

シテ 「月やあらぬ。 春や昔と詠めしも。 いつの頃ぞや筒

井筒。

地 「つゝるづゝ。 井筒にかけし。

シテ 「まろがたけ。

地 「おひにけらしな。

シテ 「おひにけるぞや。

地 「さながら見々えし昔男の。 冠直衣は女とも見えず。

男なりけり業平の面影。

シテ 「見ればなつかしや。

地 「我ながらなつかしや。 亡婦魄靈の姿は。 しほめる
花の色なうて。 にほひ残りて在原の。 寺の鐘もほ
のぐと。 明くれば古寺の。 松風や芭蕉葉の。 夢
も破れて覚めにけり。 夢は破れ明けにけり。